

学校創立百三十周年事業として、また耐震という課題もあり、本校の南校舎・理科館・北校舎の東半分・旧中学校舎等を解体し、西館と呼ばれる特別教室・ホームルーム棟を建設しました。残す北校舎の西側部分は耐震補強を施し、周辺の外構を整備して、今年度の夏休み中には、すべての工事が終了する予定です。建築にあたっては、生徒の声を聞こうと、生徒によるワークショップを何度かもち、どんなことを新施設に願いたいのかのディスカッションをしました。それを若手教員のワーキング・グループで受け止め、建築委員会に提案していく過程を経て、建築のコンセプトを、「関わるのが元気のもと」として、コミュニケーションスペースや、さまざまなもの・ことへの関わりを念頭に置いた設計をお願いしました。

まず、南校舎の東側を解体し、現在の西館の東半分（職員室特別教室棟）を昨春に建築して、引越しました。そして次に、南校舎西側と理科館を解体して、西館の残り（ホームルーム二十五教室）を建てました。今年の二月末に完成し、また引越しをして、今度は北校舎の東側と旧中学校舎の解体が始まりました。

それらの校舎は一九六〇年代から七〇年代に建てられたものです。長い期間にわたって、本当に多くの生徒が学び、友との出会いや先生との関係、クラスの取り組み、あらゆる学校生活が行われた、その校舎を、新築のためとはいえ取り壊すのは、見ていて感慨深いものがあります。クラッシュャー（破砕機）が校舎に食い込み捻り切っていく様は、何か巨大な草食動物に肉食の恐竜が襲いかかるような感じもして、「もっと優しく」などと思ってしまう。

あらためて、この校舎が私たちを守り、包み支えてくれていたのだと、この校舎の中で安心して様々なやりとりがあったのだと、気づかされます。私たちは「私」そして「私と誰か」という人間を中心に考えますが、その営みのすべてを黙って支えているものがあって初めて、成り立っていたのです。そういう点で、この壊されていく校舎に改めて敬意と感謝を捧げ、お礼を申し上げたいと考えて、先日全教職員で「旧校舎のお別れ式」を営みました。いわば、旧校舎のお葬式です。読経をし焼香をしました。

私たちが「もの」だと思っている「作られたもの」のすべては、そこに願いがこもっています。たとえ、大量生産の工業製品であっても、製品を産み出そうとする人、設計する人、より良いものにと仕上げる人、それぞれの思いや願いがこめられています。若い女性の洋服の裁断を仕事とする、ある高齢の知人が、「仕事をしながらいつも、できあがった服を着てくださる方を思い描きながらやっています。清らかな乙女に着ていただくのですから、仕事をするとき、心清くしなければと思っています。」とおっしゃるのを思い出します。学校の制服も、そのようにして私たちのところに届いているのです。

また、人間でも同様ですが、お葬式に参列して、改めて、それまでそこに確かに存在していたとの思いを強く持ちます。お葬式とは、なくなつた事実の共有であると同時に、そういう存在の確認でもあるのです。確かにここに一つの人生があったのだと、確かにここに校舎があり、学校生活があったのだと。

モノや施設は、単なる物質の集積に見えますが、人間と関わる時、それは「いのち」を持ちます。大谷中・高等学校には、勿論「いのち」が生きています。人間がそうであるように、もしその「いのち」を失ったとき、それはいわば「死体」になります。物質としての校舎が、その姿を失っていても、そこに生きていた「いのち」は受け継がれなければなりません。校舎を殺さないために、私たちに与えられている大事な課題です。